

新宝 間物

vol.15

タカラモノニュース

そばに**いる**だけ、
話を**聴く**だけ、
一緒に**笑う**だけ、
 それでいい。



ふくしま
復興のために
活動するひと

(学生団体)
福島大学災害ボランティアセンター



集会所の中には、プラスチックの球が飛び跳ねるリズムカルな音と、お年寄りや若者たちのにぎわしい歓声が飛び交っていた。

「こは福島市飯坂町にある北幹線第一仮設住宅。東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故で避難している浪江町民百二十八世帯、二百六十九人が暮らしている。震災と原発事故から四年余りが過ぎ、災害公営住宅などに転居する人が増え、百九十六戸のうち二十四戸が空室となっている。住民の約六割は六十歳以上で、十代、二十代はいない。」

この仮設住宅に今年六月、二人の大学生が引っ越してきた。『福島大学災害ボランティアセンター』に所属する佐藤俊一さん(四年生)と高橋航平さん(三年生)だ。同センターが企画運営する『いるだけ支援』の第一弾として、九月までの三カ月間それぞれ2DKの空き部屋で暮らす。この日二人は、住民のグループが行っている健康増進活動のひとつである卓球に、ボランティアの学生たちとともに参加していた。



受け継がれる志

佐藤さんと高橋さんが所属する『福島大学災害ボランティアセンター』は、二〇一一年五月一日に発足した。しかし、実際の活動開始は同年三月の震災当時にさかのぼる。震災と原発事故直後、福島大学には大勢の被災者が避難してきた。自主的に集まった学生たちが大学内や市内の避難所でのボランティアとともに炊き出しや被災者の支援に奮闘した。五月に入り大学が始まり、学生たちが戻って来るにつれてボランティアの希望者も増えていった。支援を必要とする被災者がいて、ボランティアを志す学生がいる。両者をつなぐ必要を感じた既存のボランティア団体が中心となって設立したのが『福島大学災害ボランティアセンター』だ。当時を知る学生はすでにいないが、彼らの志は続く世代へと受け継がれ、現在約三百五十人の学生がボランティアとして登録している。

お金や物には代えられない

『いるだけ支援』は、学生が二人ずつ三カ月交代で二年間仮設住宅に住み、住民への声掛けや買い物などの身の回りの世話を行うほか、自治会

仮設に大学生が引っ越し越してきました

これからも繋がっていく!

佐藤 俊一さん



ボクのいえい!

高橋 航平さん



ドアノブには居場所を喜いたポートを掛けて



ハーブ育ててます!

足を温め手を揉んで、耳を傾ける

現在は主に、市内の仮設住宅を訪問して足湯や『JOYBEAT』というエクササイズコンテントを活用した健康づくり活動のほか、花見、芋煮会、クリスマス会など季節ごとのイベントを実施している。また、南相馬市で清掃・片付けなどの復興支援活動をしたり、関東・関西などのイベントに参加して福島の元気を発信する活動や、長期休暇の子どもキャンプの企画運営も行っている。参加者は登録している学生にメールリストで募る。



足湯活動



JOYBEAT活動

佐藤しおりさん



いもぽかぽかです!

「みなさんと自然な会話を楽しみたいから」と話す。



仮設住宅で芋煮会

活動をサポートする。高齢者が多い仮設住宅で、空白の世代となっている若者との交流を通じてコミュニティを活性化させようというものの。復興庁の『心の復興』事業にも採択された。

新しく住民となった二人の毎日忙しい。朝は住民のみなさんに交じってラジオ体操。月曜日は卓球、火曜日は習字、木曜日はカラオケ、他にも踊りやヨガ、お茶会など、住民の活動には積極的に参加する。もちろん大学にも通う。時間があるときは仮設住宅内を散歩して住民に声を掛けたり、敷地内の草刈りなど

一人ひとりと“お互い様”

高橋さんは引っ越し当日のことが忘れられない。「若い人が来てくれて本当にうれしい」と涙ながらに話してくれたおじいさんがいた。衝撃を受けた。支援しようとして越してきたが、夕飯を差し入れてもらったり、体調を心配されたり、逆に自分が気遣ってもらっている。「お互い様」という双方向の関係が築けたこと

楽しいから続けられる

同センターに所属している学生は、みなボランティア活動を楽しいという。

鈴木悠平さん(四年生)は、二年生の時、ゼミの教授でボラセンの顧問をしている鈴木典夫教授に誘われました。最初は被災者は暗い方が多いのかなと想像していましたが、明るい方ばかりで逆に元気をもらっています」と話す。ボランティアを通じて地域コミュニティの大切さを学んだことを活かしたいと、公務員を目指している。

楽しいなあ〜

鈴木 悠平さん



を行っている。引越しの挨拶代わりに餃子パーティーを企画したり、お盆にはキャンドルを灯して夕涼み会も催した。

そんな二人を住民は「大歓迎」と口をそろえる。一緒に卓球を楽しんでいたおばあさんたちは、「若い人と一緒にいると若返る」「家族が増えたようだ」「この楽しさはお金や物には代えられない」と顔をほころばせた。



は、これまでのボランティア活動と大きく違います」という。これまではボランティアの対象を「被災者」というカテゴリで見えていた。仮設住宅で生活を共にして住民一人ひとりが見えてくると、彼らを「被災者」と一括りにすることがいかに失礼かと気づかされた。「これからも一人の人間として付き合っていきたいと思っています。」



スマッシュ早い〜!

加藤実可子さん

加藤実可子さん(三年生)も、「楽しいから続けていける」という。ボランティアに参加して人との関わりが広がった。「それまではどちらかというと引っ込み思案だったのが、社会的になりました」と、自身の変化を喜んでいる。



そばに**いる**だけ、
話を**聴く**だけ、
一緒に**笑う**だけ、
皆**それぞれ**がいい。

資金難の苦悩

だが、「楽しい」だけでは、活動が続けられないのが現実だ。仮設住宅を訪問するにもイベントを実施するにもお金がかかる。現在は、企業・団体等の助成金と寄付金に資金を頼っている。助成金はインターネットで探して申請手続きも学生が行っている。毎年支援を続けてくれる企業などもあるが、経理は火の車の経費は学生に立替えてもらっているが、精算を待ってもらうこともある。活動資金の管理を務める加藤さんは「いつも綱渡り状態です。メンバーのこんな活動をしたという希望は実現したいが、資金的に難しい場合もあります。できれば、みなさんからの寄付をお願いしたいです」と訴えた。

音楽も
福島も大好き!

三浦 恒彦さん

福島の良さを伝えたい

『災害ボランティアセンター』に参加するために福島大学に入学した学生もいる。三浦恒彦さん(四年生)は、震災当時高校二年生、北海道に住んでいた。「次の日、学校に行ったら普通に授業をして、普通に部活して。福島ではままたらないのに、なぜみんな疑問を感じないのか」と思った。音大を志していたが、音楽を通じて福島で何かできないかと福島大学進学を決意した。周囲の反対はものすこかった。「若い正義感だったのかな。うまく説明ができなくて、結局、受験もアパートの契約も自分の貯金で何とかしました。」ところが、福島で待っていたのはイメージとのギャップだった。「みんな、もつと生きるのに必死なのかと思っていた。震災後二年目で、被災者のみなさんはけっこう明るかった。」自分が感じるこのギャップは福島と他の地域の人々とのギャップでもあった。

「このギャップを多くの人に伝えなくてはと考えた。「まずは、被災者のみなさんを知ることから始めました。いろんな活動に参加して、いろんな言葉をもらって、曲にしました。」

三浦さんは卒業後、福島で就職する。「一生、福島で暮らすつもりです。四十年後にどれだけ訛っているか楽しみです」と笑う。これまでに作った曲は、被災者の体験を伝えるものだった。今作っている曲は、なぜ自分は福島が好きなのかを歌ったもの。「これからは福島の良さを伝えていきたい。」

学生たちがボランティア活動で得たものは、被災者、支援者という枠を超えた、人と人とのつながり。仮設住宅で暮らす佐藤俊一さんは、「いろんな人と出会えたことに感謝しています。ボランティアをしなければ出会えなかった」と振り返る。寄り添い、共感することの大切さを知った彼らが、きつと新しい福島をつくる大きな力になってくれるに違いない。

ご寄付をいただける方は、こちらからメールでご連絡ください。

福島大学災害ボランティアセンター

検索



折り返しご連絡させていただきます。よろしくお願いたします。



(学生団体) 福島大学災害ボランティアセンター

〒960-1296 福島市金谷川1番地
E-mail fukudai_volunteer@hotmail.co.jp
HP <http://fukudai-volunteer-center.jimdo.com/>
twitter: @fukudai_jrudake facebook はこちら→



発想から発送までお客様のニーズにお応えします。

タカラ印刷株式会社

〒960-8141 福島県福島市渡利字絵馬平86-9
TEL.024-526-4303 FAX.024-526-4302
E-mail sky@inaka.co.jp <http://www.takara.inaka.co.jp/>



RB-ISO CM044



適用範囲:印刷・製本・社会調査